
皆の欲しい物はなんなのだ

輝ける星光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皆の欲しい物はなんなのだ

【Nコード】

N3536S

【作者名】

輝ける星光

【あらすじ】

古代遺跡を踏破して得た太古の遺産を売却し、かなりの金銭を得たアストライアメンバー。彼等のリーダーであるノイウエルは、報酬の使い道として仲間達への贈り物を考案した。果たして皆が欲がる物は、なんなのだろうか？

リリナの欲しい物（前書き）

執筆者：ういーち

リリナの欲しい物

一振りの剣と見える独特な形状を持つ魔導飛翔艦アストライア。それそのものが旧文明の遺産でもある高機動戦艦は、太古に行われた終末戦争の末期、決戦兵器として建造された最新鋭機である。速力や戦闘能力は言うに及ばず、乗組員に対する高度な居住保護・生存機能も特色の一つだ。

艦内は高級ホテルさながらに格調高く、清廉な構造様式で以って整えられている。白を基調とした内部空間は、機能性と利便性への拘りから最高位の品質が求められ、戦闘艦らしい無骨さは皆無に近い。

長期に渡って乗船する乗組員へ配慮して、閉塞感や圧迫感を極力与えないよう設計されており、通路一つとっても広々としている。艦内に多数作られている個室に至っては、数人が共同で使っても無理なく生活出来るだけのスペースが確保されていた。

全四層構造からなるアストライアに於いて、居住区は最上部の第一層区に位置する。白く長い廊下に連なる各個室は、個人で使うには些か広すぎる空間ながら、乗組員一人一人に私室として提供される。その中の一室に、艦長付きの護衛兼メイドであるリリナ・レイツェンは居た。

彼女の部屋は非常に無機的で素っ気ない。壁や床は最初期のままであり、一切手が加えられていなかった。家財道具もテーブルと椅子、クローゼットと姿見、小型冷蔵庫と食器が少々、壁際に据え置かれたベッド、それだけである。華やかさは微塵もなく、年頃の女性の部屋とは思えないほど簡素で侘しい。彼女の淡白な気質が如実に表れている部屋だった。

殺風景な領域で、リリナは常のメイド服を着たまま椅子に腰掛けられている。彼女が向き合う先には、飾り気のないシンプルなテーブルが一つ。その卓上へ置かれるのは、大きさや刃渡りの異なる十数本

のナイフ達であつた。

氷の仮面を思わせる無表情で、リリナはこれを黙々と磨いている。ただ刃のみを見詰め、一切顔色も変えず刀身を研ぎ澄ます姿からは、彼女が何を思っているか杳^{よう}として知れない。

だが彼女との付き合いが長い者であれば、自前のコレクションにして仕事道具でもある鋭利な刃達を磨き上げることが、元暗殺者である艦長護衛の趣味だと理解できただろう。

リリナ自身が大きく動かない為に、室内の空気も変動がない。静謐な室内には彼女が手を動かす僅かな音が上がるだけで、無音に極めて近かつた。そこへ軽いノックが起こす、硬質な振音が飛び込んでくる。

「リリナ、話がしたいのだがよいか？」

閉ざされた扉の先から、細く幼いが元氣のある声が聞こえた。

自分の名を呼ぶ主君の言葉に、リリナは手を止めてナイフを机上へ置いて振り返る。

「ノイエル様、どうぞお入り下さい」

彼女が了承の意を告げると、白い扉がスライドして一人の少年が現れた。その頭の上には、緑色のプルプルした物体とも生物ともつかないモノが乗っている。

「それでは邪魔をする」

「ぷるー」

言いながらノイエルと緑色のプルプルしたモノが室内に踏み入ってきた。彼等が進むと扉は自動的に閉まり、再び内外を完全に隔てる。

「こちらに御掛け下さい。只今、飲み物を御容易致します」

椅子から立ち上がるとリリナは対面側へ歩き、向かい席を引いてノイエルに勧めた。少年艦長がゼリーのような得体のしれないプルプルを頭に乗せたまま、其処へ座るのを確認して冷蔵庫へ向かう。「気遣いは無用だ。今はそなたも休みの時間であらう。別段に余の世話を焼く必要などないぞ」

「私も丁度、喉が渴いていましたので」

「ふむ、そうか。それでは馳走になろう」

「ぷるる」

リリナは開けた冷蔵庫の中からノイウエルの為に用意してあるジュースを取り出し、透明なコップ二つへ注いでいく。濃いオレンジ色の液体に満たされたコップを左右の手に持って、メイドは無駄のない動きでテーブルへと戻ってきた。

ナイフの合間を縫ってノイウエルの前へ一つを置き、先まで自分の座っていた席へ腰掛ける。

ノイウエルは眼前のコップを手に取り、よく冷えた飲料水を一口含んだ。喉を鳴らしてこれを飲むと、舌全体に広がった甘みが食道を滑り落ちて胃に満ちる。

好む味わいに少年が顔を綻ばせる最中、頭上の緑はテーブルへと素早く飛び下りていた。艶のある小山状の体を震わせながら、プルルはナイフの合間を楽しげに跳ね回る。

主君とそのペット（？）の動きを目で追った後、リリナは正面に座すノイウエルへ問いを投げた。

「それで、どのような御用件でしょうか？」

変化のない無機的な面貌から送られる冷静な声に、少年はコップを置いて一度頷く。

「うむ。先だつての冒険で大きな収入が得られたのは周知の通りだ。これは皆の協力があつたからこそ。そこで慰労と感謝の意味を込めて、各自が欲する物を提供しようと思うのだ。俗に言うプレゼントであるな」

「それは良い御考えですね。皆様も喜ばれることでしょう」

「おお、そうか。そうであつたなら、余も嬉しいぞ」

「ぷるる」

表情こそ揺らがないが、好意的なリリナの肯定にノイウエルは笑みを浮かべる。これへ応じるようにプルルも嬉しそうに飛び跳ねていた。

「では、まず最初にリリナの欲しい物を教えてくれ。予算のことならば気にせずともよいぞ。魔導式原動機オートモビルの10台や20台を買っても釣りがくるほど潤沢であるからな」

「私のことは御気になさらず。ノイウェル様が求められる物を手に入れて下さいませ」

「そうはいかん。リリナにも大変助けられたのだ。働きに報いぬでは余の気が治まらぬ。なにより、リリナはもつと自分のことで我俣を言うべきだぞ」

申し出の辞退を却下されて、リリナは目を瞬かせた。ノイウェルの言葉は彼女自身が考えてもみなかったことである。少々面食らった。しかしそれも一瞬のこと。冷淡な相貌は変わらない。

生真面目な顔で見詰めてくるノイウェルを前に、沈思すること数秒。リリナは静かに頷きを返す。

「畏まりました。それでしたら、前の戦いで使えなくなったナイフの代わりを、新規に数本欲しく思います」

「ふむふむ。新しいナイフか」

「ぷるっ？」

ノイウェルは懷から手帳とペンを取り出して、述べられた注文を書き加えていく。その様子をプルルは卓上から円つぶらな瞳で見上げている。

「デア・ダシツクという職人が手掛けた品を希望します。彼女の鍛造品でデュランダル仕様のH―O型からJ―17型というタイプが求めるところ」

「なるほど。他には何か？」

「そうですね……新しいメイド服を20着ほど頂けないでしょうか。こちらはノイウェル様の見立てにお任せします」

「メイド服か、ふむ。何か特別な装飾や機能は必要か？」

「いいえ。汚れに強く動き易ければ問題ありません。特別に注文をつけるとするならば、ノイウェル様が御傍に置いて満足なされる品を御選び下さい」

「むむ、中々に難しいな。他はどうだ？」

「最後に少々高級なティーセットなど所望させて頂きます。こちらは食堂に据え置き、皆様が味わえるようにしたいと思いますので。私の求める物は以上で御座います」

与えられた提言を余さず筆記して、ノイウエルは手帳を閉ざした。満足さと嬉しさが混在する笑顔を顔に乗せ、要求表を懐へと手早く収める。

「リリナの願いはしかと聞いた。必ず揃えて見せるぞ、安心してくれ」

「それには及びません。ノイウエル様が御買い物に向かわれる際は、当然私も同行致しますので」

「見損なってもらっては困るな。いい加減、余とて一人で買い物ぐらい出来るぞ。リリナはゆっくり休んでおるといい」

「そうは参りません。何処で何が起こるか分からない世の中で、ノイウエル様を御一人にさせるなどと、到底聞き入れられぬ話です。それに現実問題として、買った品々を運ぶ人手は必要でありましよう」

「む、うむう」

「それだけではありません。何処で、何を、どのように買うのか、ノイウエル様御一人の手には余る事が多々かと。とかく私のナイフや、他の方が望まれるだろう消費分の補充弾薬などは、専門の知識を持たぬ者を選び出すのは難しいでしょう」

難しい顔で思案に入るノイウエルへ、リリナは間髪入れず畳み掛ける。態度こそ慇懃だが、口にする言葉は有無を言わさぬ威圧感が宿っていた。

現実を叩き付ける強硬な説得力で、主君の氣勢を削ぐ心算が窺える。子供相手になんとも大人気ない限りであるが、そこに彼女の譲れない意志が見えるのも事実。どうあっても離れまいという決意の程が容易に知れた。

「なによりもノイウエル様はこのアストライアの艦長であり、皆様

の指標であります。それを護り通すのが私の使命にして存在価値なのです。その職務を全うせず、のうのうと自分だけが艦内で休んでいることなど出来ません。そもそもそちらの方が気が休まらない。私に休めと言われるのでしたら、ノイウェル様の御傍に控える事を御許し願います」

「そなたの話は分かった。確かに余の認識が甘かったようだ。一人ではまだまだ出来ぬことが多い」

己の信念を前面に推し立て、淡々としながらも熱さを秘める言いで攻めるリリナ。彼女が傍に立った当時からこれを言い下す術がなく、また決して退かぬ事を知る故に少年は自ら折れ、従者の同道を素直に認めた。

「御理解頂き嬉しく思います」

これにリリナは恭しく頭を垂れる。

普段は比較的他者を立て、自らは一步退いて物事の推移を傍観している彼女であるが、ことノイウェルに関する問題には誰よりも積極的だ。平時とは対照的に極めて強引となり、冷めた表情と畏まった物言いのまま相手を圧倒する。誰が相手であつてもだ。

それだけ主君の存在に重きを置いているのだが、その忠誠ぶりは尋常でない。自らの意義の全てを懸けているというのは、けして物の例えでなく言葉通りの意味である。先の冒険で身を呈してノイウェルを庇ったように、彼が安全に進む為ならば我が身を厭わぬという姿勢が、強い依存或いは執着として皆にも知られていた。

もしもアストライアメンバーの誰かが、明確な悪意を以ってノイウェルに危害を加えようとするならば、それが何者であれリリナは躊躇せず対象を抹殺するだろう。いかに苦楽を共にした仲間達、困難を越えて絆を深めた同志であろうと、ノイウェルの存在を引き合に出したなら彼女の天秤は一瞬で主君へと傾ぐ。それがリリナ・レイツェンという存在の芯であるのだから。

「さて、それではそろそろ行こうと思う。他の者達にも話を聞かねばならぬからな」

「ぷるー」

出されたジュースを飲み干して、ノイウエルは椅子を引いた。彼が立ち上がると、プルルも緑色の体を弾ませて飛び上がる。そのまま綺麗な弧を描き、蒼い髪に包まれた頭頂部へと軽やかに着地を決めた。最早ここが定位置であると自負するように、さも当然という顔で陣取っている。

ノイウエルとしてもすっかり慣れたものだ。半透明のゼリー体は一枚の羽根が如く重さを持たず、それが為にまったく気にならないという事も要因としては大きい。

「では、私も御供致しましょう」

「よいよい。皆に会いに行くだけなのだから、そこまで気を回す必要はなからう。この艦内は世界の何処より安全なのだ。何も心配する必要はあるまい。こればかりは譲らんぞ？」

苦勞の末に見付け出した自艦である。その性能、保安性に絶対の自信を滲ませて堂々と胸を張り、ノイウエルは誇らしげに口を開く。次いで悪戯っぽい笑みでリリナを見ると、人差し指を立ててメイドの動きを制した。

その姿に微笑ましいものを見つつ、面上こそ変えないまま今度はリリナが身を引く。優美というにもあまりに色気ない、機能性のみを追求したという無駄のない所作で一礼し、浮かしかけた腰を再度椅子へと沈めた。

「左様で御座いますね。では、御言葉に甘えさせて頂きます」

「うむ。出された飲み物は美味であつたぞ。馳走になったな、礼を言う」

「御喜び頂けましたなら幸いです」

プルルを頭に乗せたままノイウエルはテーブルを迂回する。その姿を見送りながら、リリナの視線も同時に動く。

程無く白地基調の自動扉に辿り着いた少年は、これの正面に立つてもう一度振り返った。

「そうそう、さっきの話であるがな。余は、どんな衣装を着ていよ

うとも隣に立つのがリリナであるなら委細構わん。そなたが傍に居てくれるだけで、余は充分だぞ。だからどんなメイド服であろうと、あまり拘らぬ」

それだけ告げると笑顔を残し、ノイウエルは開かれた扉を潜っていった。少年と頭上の緑が外に出るのを待って、機械仕掛けの扉は素早く閉じる。

この一連の動きを、リリナはじつと見詰めていた。動く扉、去っていくノイウエルの後姿。確かにそれぞれを注視してはいる。しかしその実、彼女の紫瞳は何も映してはいない。視界に入る情報の一切を、脳が正常に理解していないのだ。別のことに処理能力の全てが傾き、しかもそれ自体が上手くいっていない。思考の歯車が雲に取って変わられたように、正常な動作を失っている。

理由は簡単で、彼女の主たるノイウエルが去り際に残していった言葉が原因であった。

リリナにとってノイウエルは尊き存在。護るべき主君。自らの支配者。命を懸けるに足る王者。即ち同じ目線になどありえない上位者で、ある種、神にも等しい崇敬の対象である。いかに年下で、長らく傍仕えをしていようと、弟や我が子のように思うなど皆無であった。ましてや異性として意識したことなど絶無もいところだ。そう、今までは。ノイウエルに仕えること早5年。その間、リリナは年若き主を忠実なる臣下の目線で捉えてきた。それが彼女にとっての常識であり、普通であり、日常であり、真実だった。

それなのに、である。

今し方の言葉を聞いた瞬間、鋭利な刃の如き思考回路は突如として桃色の霞が掛かり曇ってしまった。勇猛な意識野は前後不覚に陥り、澄明な認識力が暗転するやら正体を失うやら。今の今まで感じたことのない、奇妙としか言い表せない変容に見舞われてしまう。

微かな動悸を覚えて、リリナは不意に我へ返った。そこで初めて自分が動揺している事に気付く。そして動揺している自分に思い至って、また動揺する。何が起こったのか、自らの心身がどういう状

態に蝕まれているのか、彼女自身には皆目見当がつかない。自分のことが分からないもどかしさに歯噛みしつつも、されど不思議と嫌悪感はない。というか、寧ろなんだか少し気分がいいような。

高揚感と表現するのが近いだろうか。胸の奥底が跳ねて躍るような小気味良さは、得体が知れないなりに手放し難い。悪い気はまったくしないのだ。温かいような、優しいような、言語化の難解な状態。

「これはもしかすると、以前にヒカル様から聞いたものなのではないか？」

敬愛して止まないもう一人の主君、ノイウエルの母であるヒカル。彼女にかつて口頭で教えられた感情の一節が、リリナの脳裏へ過ぎる。

確かあの時に、蒼い髪の美しき主上は『説明するのはとても難しい。実際に体験しなければ分からない』という旨のことを言っていた。ただその時に彼女が述べた言葉と、今の自分に起きている状態は似通っている部分があるような気がするのだ。

そういった感情の発露の結果として、意識の向かう相手と相互理解の末に肉体関係を結ぶとも聞いた。リリナもかつて北大陸の暗殺組織に属していた頃、相手の不意を突く目的や、情報を引き出す作業として、暗殺業の一環に異性と肌を重ねた経験は何度もある。しかしその時はただの１ミリとて心は動かず、己の何かが一欠けらであろつと微動だにはしなかった。現在ほとんど人間味を持ち合わせていなかったからかもしれないが、それでなくとも恐らく琴線に触れるものはなかったように思われる。

だからこそ、ヒカルの言葉を頭から信じる事が出来ず、理解不能なものとして忘却していたのだ。それが今になって思い出された。まだ明確な形も定まらず、到底掴めるものでもない。自分が抱いたのは何の類なのかも判然としない状況である。美麗なる主の教えが、自身の状況に直結するとも分からない。それでも記憶の底から湧き上がった遠い思い出の１コマは、意識のどこかで双方の関連性を嗅

ぎ取っているということなのか。

「私は、どうしてしまったのでしょうか」

誰にともなく呟いて、リリナは卓上へと向き直った。

胸中の躍動感を持て余し、初めての事に多少頭は混乱している。

不自然に乱れる心を落ち着かせる目的から、置かれていたナイフを再び手に取った。磨く作業を再開しようと、その刃を覗き込む。

そこで気付いた。鏡面さながらに世界を映し返す白刃に、自分の顔を見て。その頬は、控えめな朱色に淡く染まっている。

ハウエンツァの欲しい物？（前書き）

執筆者：ういいち

ハウエンツアの欲しい物？

白亜に輝く超大な剣。雄大な蒼穹を縦横無尽に突き進み、棚引く雲海を吹き散らす雄々しきそれは、星辰を切り裂く剛剣である。

今は遠き3000年の昔、ギリシャ神話と呼ばれた神々の系譜にその名は連なる。絶対的な力と権威を振るう神族の王ゼウスと、法や掟を司る戒律の女神テミスとの間に生まれた娘。秩序、正義、平和の体現であるホーライ三女神の一柱で、正義の神格化ディケー女神と同一視された公正なる見守り手。

地上を次々と去る神々の中、最後まで世界に留まり人間達に正義を説き続けた唯一の女神。しかし墮落し欲望に染まった人類へ失望し、最後には天へ昇って輝く星になったとされる。それ故に「星乙女^{イデア}」とも呼ばれる存在。

輝ける惑星の明光を示す女神の名と、正義の執行者たる剣の姿を有した巨艦。高機動魔導飛翔艦アストライアは今、自由奔放な冒険者達の拠点として新たな時代を駆け抜けている。

その全運用を統べ、艦内への円滑なエネルギー供給を行う心臓部、機関動力部は艦後方の第二層区に存在した。剣に見立てられるアストライアに於いては握り^{グリップ}へ相当する部位に位置付き、居住区の下層へ置かれた研究セクションとは地続きの構造である。

艦内の全機能を賄う最重要区域である為、入り口は非常に堅牢な扉で閉ざされていた。通路全体を塞ぐ形で設置されている扉は、白を基調としていながら何の意匠もなく、無骨で重々しい。全容に近寄り難い雰囲気があり、見ているだけで圧迫感を覚える。何人の侵入をも拒む断固とした意思と、物言わぬ迫力が感じられた。

それを正面に据え、ノイウェルは一人通路に立つ。巨大な鋼鉄扉を見上げ、一度大きく息を吸った。

「開門」

毅然とした態度で少年は告げる。放たれた一声は無音の空間へと

広がり、静寂の海に吸い込まれていった。

数秒後、微かな駆動音を放ち、巨大な隔壁が動き始める。分厚い特殊鋼の扉は中程から分離して、上下へと個別に進んだ。けして遅くはなく、寧ろ高速と言える動きで天井と床に素早く収納されていく。隔壁の消失によって道が開けると、数メートル先に新たな扉が確認出来た。然して広くもない通路に立ち塞がり、奥への道を完全に塞いで護る。

だが機械的な反応音が小さく唸り出すと、鉄壁の護りはいとも容易く開放を迎えた。隙間なく通路を埋めていた白の扉が、規定のコースを淀みなく滑り左右へと進む。乾いた空気を震わせながら、鋼鉄の扉は数える間もなく両壁に飲み込まれた。後には開けた道だけが伸び、障害物の痕跡さえ見られない。

二つの隔壁が消えた先へ通路は続く。上下四方を無機質な鋼材で固められた物寂しい道だ。同じ作りの空間が延々と続き、変化といえるものは何もない。天井に設けられた埋め込み式の照明が、煌々と照らす世界は白亜。他の場所と違い、この通路だけは品位や安定した美しさに欠けている。余計な物を排した冷たさと抜き身の機能だけが全てだった。

ノイエルはその道を奥へと向かい歩いていく。頭の上には例の如く緑色のプルプルしたモノ、プルルが鎮座する。一人と一匹の行進を妨げる物はない。しかし彩る物とて一つとない。ただ無味で空虚な空間が、深遠への道標であるかの如く続くばかり。

変化のない世界を進んでいると、時間の感覚が分からなくなるのはままあること。最初のうちは体感時間を正確に認識していても、同じ風景内で同じ動きを繰り返すと流石に判別がつかなくなってくる。数秒か、数分か、数時間か。自分はいったいどれだけの時間を過ごしているのか。頭の中は緩やかに混乱し、理解力が錆付いてしまう。

こうした現象は少年艦長へも平等に起こっており、自分の踏んだ距離と費やした時間とが、等分に捉えられなくなっていた。あたか

も詐欺師に騙された被害者のような気分を味わってしまう。

そんな言い知れぬ不安感と酩酊感に似た困惑を抱えながら進んでいた折、唐突に世界が開けた。正確には当初から開放空間自体は存在していたのだが、麻痺した感覚と狭窄した視野に邪魔され、通路を進む者は認識と理解が出来なくなっていたのである。

ノイウエルが踏み入った領域は広大。白く染まる堅固な鋼材で作られた壁は左右に遠く、前後に長い。見上げれば天井までの距離も飛び跳ねて届くものではなく、磨かれた床は地平までとはいかなくとも彼方へ伸びる。かなり大規模な空間が確保されているらしく、今まで通ってきた通路との落差に眩暈に似た症状を覚えるほどだ。

奥行きを持つ世界は、一切が歪み無く完璧な平面で作り上げられていた。それでいて等間隔を空け、何本もの柱が立ち並ぶ。太く巨大な白柱は天蓋へ達するまで突き立ち、整然と領域を埋める。傍近くに立って耳を澄ませば、柱の内部から小さな電子音ないしは機材の稼動音が聞こえただろう。

空間全体の在り様は、印象として神殿に近い。荘厳な空気と燦然たる風姿は、神聖なる天主の御座に通じるものがあつた。とは言っても神秘性や王君の威厳が湛えられるというわけではなく、人智の及ばぬ遠大さこそそれであるが、本質に照らしてみれば理解出来からざる「何だか凄い」という感覚に帰結する。超越的な神々しさを読み取れないのは、やはり人の手によって造られたが故の地遊感に因る。悪い意味ではなく、得体の知れなさが若干量薄いという観点から、親しみは易い。

かような領域の最深部は、ある一定の区画から、壁や天井を構成している材質が変化する。というか、形状がまったく異なる物に変わってしまう。

長くのたくった管の群だ。太さの異なる大小無数のパイプやコードが、複雑に入り組んで床を埋め尽くしていた。壁や天井に至るまで配管配線が覆い、安定した平面部など存在しない。足の踏み場すらない密集状態である。しかもそれら無数のパイプ類は、一つの例

外もなく全てが動いていた。無機物でありながら肉感的な蠕動を繰り返し、血管のように力強く脈打つ。

数百或いは数千に及ぶだろう数え切れない程のパイプ、コード、チューブが犇く様は、まるで途方もない数の蚯蚓が群れているか、多種多様な蛇が絡まりざわめいているようだった。それは生々しく重苦しい空気を作り、眩暈と吐き気を催す。心の弱い者が目の当たりにすれば、卒倒してしまうだろう。

膨大な量のパイプ群が、チューブの束が、コードの集合体が、床から天井から壁面から全体へ覆い被さり、苔か蔓の如く埋め尽くす場所。怪物の体内に迷い込んだなら、このような環境が待ち受けているのかもしれない。おぞましい世界だ。狂的でさえある。魔導艦の中とは思えない。

そこそが脈打つラインの集約点だった。生物的な管線が全方位から集合し、空間の最深部域が一点で絡まり合っている。しかし存在するのはそれだけでない。蠢くパイプの群に囲まれて屹立する巨大な物体を、ノイウエルは見た。

濃い紫色の結晶体だ。人の倍は大きく、同様に重量感も溢れている。側面は綺麗に削られ、僅かな取っ掛けりもない完成された平面。全周を見ると六角形であり、頭頂は山形、全体が妖しくも美しい輝きを放つ。

その巨大な結晶体は無数のパイプやコードに連結され、この空間の王者が如く君臨していた。アストライアの全てを支える魔導機関だ。

ノイウエルの求める人物は、その正面に胡坐を掻いて座っている。まとまりなく垂らされた銅線色の髪には油じみた汚艶が光り、よれた白衣の背へと流れていた。髪から突き出た笹穂型の長い耳が彼人の種族的特徴を教える。周囲へ煙草の吸殻が無数に散っていて、場の雰囲気は問答無用で破壊しているのが何とも言えない。

「ハウエンツァよ、此处に居たのか。捜したぞ」

ノイウエルは白衣の背へと近付きながら声を掛ける。これに対し

て床へ直座りしていたエルフの研究者は、肩越しに目付きの悪い双眸を突き込んできた。

「あんだあ？　おい、クソガキ。誰の許しを得て此处に入ってきてんだコラ。低脳な凡人が居ていい場所じゃねえぞ」

居丈高に暴言を吐きつけて、ハウエンツァはさつさと正面へと向き直る。煙草を口に咥え、口端から紫煙を吹かしながら、視線は眼前へと戻っていった。

彼は自前のモバイルパソコンを起動させ、座標検出システムによって三次元空間上に立体映像化されたホログラフィックキーボードを操作している。軽快な指捌きでキーを叩き付け、その度に出現しているモニターへ無数の英数字からなるプログラムが書き込まれた。しかしてモニターは一つきりでない。実体がない故に時と場所を選ばないホログラムモニターは、七つがハウエンツァを囲む形で空中に浮いている。対して研究者の手元に出力されたキーボードは三つ。ハウエンツァはこれを巧みに使い分け、七つのモニターへ異なる図式やプログラム言語を、ほぼ同時進行で高速入力していた。

それらは構築された端から、超小型モバイルパソコンから伸びた一本のコードを伝い、直結する結晶体へ流れ込んでいく。

「話したいことがあるのだがな」

「ぶるー」

汚れっ放しの白衣や、洗っているとは思えない不潔感丸出しの髪を見ながら、ノイウエルは話し続ける。頭上のプルルも意味があるのかないのか、よく分からない鳴き声で空気を震わす。

「俺様は忙しいんだよボケが。テメエと遊んでる暇アねーんだ。オママゴトがしたけりゃ、お抱えのクソメイドか、そのゼリーダングと絡んでろガキ」

今度はもう振り返らず、エルフ技官は雑言だけで応じた。が、相変わらず口汚く相手を罵りながらも、しっかり応対している部分にまだ余裕が見られる。

本当に忙しい時は、接近者を一切無視して作業に没入するのがハ

ウエンツアの姿勢だった。それを知っているノイウエルは、構わずに言葉を繋いだ。

「現在、余は仲間達の欲する品を聞いて回っている。そこで、そなたにも一つ聞きたいことがあるのだから」

「ぷる」

「だが勘違いされてもらつては困るぞ。余は、そなたの欲しい物を聞きにきたわけではない」

「テメエ、なんだそれはよお。俺様だけハブろつてのか、ああ？ 随分とよろしいゴキョーイクを受けてるようであろ。流石は脳腐れ共の猿山大将サマだなあ、ええオイ！」

ハウエンツアは各種モニターを注視し、十指を凄まじい速度で動かしながら怒声を張る。声の勢いに押されたのか燃烧の進んだ煙草先から、崩れた灰が床へと落ちた。

けれどノイウエルは動じない。それどころか顔付きを険しくし、白衣の背へ非難の声を浴びせる。

「何を言うか。皆の協力で得た報酬だというのに、勝手に1千万イエンを奪い使ってしまったのはそなたであらう。必要であつたとしても、まずは皆に話を通すのが筋ではないか」

「うるせえ、バカ野郎ツ！ 俺様が開発した数々の超発明品がなければ、テメエ等全員魔物のエサになつて今頃は消化不良のクソ化で肥溜めに積まれてんだ。頭の足りねえボンクラ共の塵にも劣る命を救い、金の入手を決定付けた今回最大の功労者は俺様以外にありえねえだらうが！ その俺様が、自身の稼ぎを使って何が悪い。当然の権利だ。テメエ等にこそ、俺様の金を我が物顔で使おうたあどういう了見なんだ、ゴラァツ！」

「な、なんという自分勝手な……リリナは我俣を言わんが、そなたは我俣しか言わんのか」

「ぷる」

豪快に唾を撒き散らすハウエンツアの剣幕より、その身勝手極まりない横暴な理論にノイウエルは肩を竦めた。重たい溜息を吐き、

なんとも言えない面持ちで脱力してしまう。少年に合わせてプルルも空気の抜けたような息を吐き、緑の体を所在なく垂れさせる。

恥じ入るという事を知らない自称天才科学者は、鼻息も荒くキーボードを叩き続けた。視線は依然として周囲のモニターへ固定したままだが、意識の方は何割かをノイウエルへ向けている。作業しながら普段通りの偏屈的過剰自意識を全開にさせる姿は、優美で瀟洒な一般的エルフのイメージとは対照的だ。有体に言えば掛け離れている。特定種に独自の幻想を抱く人々にとって、非常に嘆かわしく信じ難い現実を容赦なく放擲していた。

「そなたに大きく助けられたのも事実だ。しかし、皆の活躍があったことも忘れてはならん。そなたの道具は優秀であるが、その道具として使う者がいなければ意味を成すまい？ 自分一人の戦果だと思うのは勝手に過ぎるというものだ」

腕を組み、神妙な顔でノイウエルは語る。

年端もいかない少年に正論で諭されようと、三十代のエルフは意に介していないが。とことん図太い神経の持ち主である。ある意味で、これも才能なのかもしれない。

「既に使ってしまった金銭は仕方ない。今回は余が皆に話をつけよう。但し、以後はこのような無法を慎むがよい。例え余が許しても、皆が等しくそうするとは限らぬのだからな」

「うるせえクソガキ、何様だテメエはボケ。最初からこの艦に乗ってる腐乱脳髓冒険バカの許しなんぞ、超天才たる俺様には必要ねえんだよ。テメエ等アホのドミノ倒し共こそが、這い蹲って俺様を崇め奉り、靴を舐めてでも求めを請うのが道理だろオが！」

紫煙を吹かしつつの声高な叫びが、アストライア深部の動力区に響き渡った。言い終わるが早いか、ハウエンツアは啞えていた煙草を痰諸共に吐き捨てて、懷から新たな一本を取り出し口の端へ挟み込む。次には「ヒ」の一言で先端に火を灯し、新たな煙を胸いっぱい吸い込んだ。

「ったく、この艦にやロクな奴が乗ってねえ。勘違い野郎のクソガ

キに、腰巾着のクソメイド。掃除かぶれの男女に、胸糞悪くなる化け物野郎。根暗メスガキもいれば、殺人料理を振舞うアホアマだ。鳥のなりそこないババアと、パツキンぶりっ子ときて、マヌケなM男、とどめが頭の足りねえメカ女とくる。よくもまあこんだけ変態共を集めたもんだ。俺様だけが唯一マトモとくりゃ、情けなくて泣けてくらあな」

自分を棚に上げまくり、憤然とアストライアメンバーを扱き下ろす。そんなハウエンツアの後姿に怒気さえ越えて呆れの視線を送りながら、ノイウエルは力なく頭を振った。

最初から分かっていたことではあるが、彼との間でこの手の話は成立しない。価値観というか認識というか、そういった一般的目線が欠落しているハウエンツアを相手取っては、全てが平行線に終始する。どれだけ舌戦を繰り広げて、後には徒勞感しか残らない。まともに取り合うだけ無駄だという諦めの境地に至りながら、ノイウエルは早々に意識と話題を変えにいった。学者エルフが誰よりも卓越したその真価を発揮する方面へと。

「今回そなたに会いに来たのは、アストライアのことでも聞きたかったからだ。一度、本格的に艦を調べ、幾つか手直しせねばならぬなら実行したいと思うのだが」

「テメエのごときマイクロ脳味噌が考えるようなこたあなあ、とっくの昔に俺様が閃いてんだよ。大腸菌程度の価値すらねえ貴様等ドクズが冒険だなんだと遊び呆けてる間に、俺様は額に汗して働いてんだ腐れチビ」

絶え間ない罵声を吐き出しがてら、ハウエンツアはキーの一つを叩く。それと同時にノイウエルの面前へホログラムモニターが出現し、幾つもの文字と数字を映し上げる。

「これはなんだ？ 外部装甲強化……推進器向上……環境システム改善……艦内セキュリティ見直し……魔導機関調整……武装修復……最終メンテナンス項目……しめて37846000000イエン！？」

モニター内に示された膨大な金額を見て、ノイウエルは驚きの声を上げた。それがあまりに頓狂で大きかったため、驚いたプルルは弾かれたように飛び上がり床へと落ちてしまう。

「ぷる」

目を回している緑ゼリーに気付かないほどの動揺に襲われ、ノイウエルはハウエンツアを見た。

「なんなのだ、コレは!？」

「テメエの欲しがってた情報だろオが。俺様が必要だと思う箇所を全てピックアップしておいてやった。感謝しろ、そして毎朝俺様への祈りを忘れるな」

「こ、こんなにあちこち不具合があるのか？」

ハウエンツアの物言いにも反応が出来ないまま、ノイウエルは再度モニターを見遣る。記されている文言は一部を除いて、どれもが艦の運行に関わってくるものだ。これだけの問題点があるまま空を飛び回っていたと思うと、今更ながらにゾツとする。

「はあゝ？ なわけねえーだろおがボケ。使い物にならねえのは武装だけだつうの。他の部分はヴァージョンアップポイントだ。俺様がより素晴らしいスペシャルな性能に作り変えてやるってんだ！ ウヒョーッ、超天才の俺様ウルトラ優っしいいー！」

両手を上げて奇声を上げる男エルフを呆然と眺めるノイウエルは、暫し思考停止に陥っていた。与えられた情報が何を意味するか改めて考えながら、必死に乱れた精神状態を整えていく。

その最中でプルルは床を勢い良く跳ね付けて、少年の肩へ乗った。そこからもう一飛びして頭への移動を終える。この頃になって漸くノイウエルはまともな思考回路を復帰させた。

「つまり、武装以外は別段異常はないということか？」

「んな当然のことを、テメエはいちいち説明されねえと分からねえのか？ まったくこれだから低劣で愚鈍な猿の出来損ないはイヤだつてんだよ。ま、それが貴様等凡人がクソたる所以であり、俺様が崇高な超天才という動かし難い事実の証明なんだろうがな」

口汚い言葉尻に嘲笑を交え、ハウエンツァはキーボード操作に戻る。幾多のキーを次々に打ち据えつつ、まだ言い足りないのか罵詈雑言を垂れ流していた。

独り言にしては大きすぎるエルフの呟きを聞き流して、ノイウエルはホツと胸を撫で下ろす。先刻、恐怖の伴う絶望感を味わったばかりである。問題らしい問題もないという事実に心から安堵していた。ハウエンツァの提示した紛らわしい情報への怒りさえ、浮かんでこぬほどには喜びを覚える。

「急ぎ直さねばならぬ箇所がないのなら、それでよい。各種の向上計画は、資金面から見ても見送りが妥当だろう」

「バカが！ 俺様の華麗なアストライア改造計画の為に、テメエ等ノータリン共が血反吐を吐いて馬車馬の如く働くに決まってるだろうが！ これから一月の内に10億は稼いでこい。これが最低ノルマだ、分かってんのか！」

「当分は武装とて必要あるまい。のお、プルルよ」
「ぷるー」

ハウエンツァの妄言を華麗にスルーして、ノイウエルは頭上のプルルへ笑いかける。緑色ゼリー気質の謎生命体は全身を左右へ揺すり、肯定と思われる返声を送ってきた。

自分の話をこれみよがしに聞き流して話を終了させんとする少年艦長へ、自称天才は盛大な舌打ちを鳴らす。だが次には口角を上弦の形に吊り、大変に人の悪い笑みを浮かべてキーを叩いた。ハウエンツァの操作によって、ノイウエルの眼前に出現しているモニターの映像が切り替わる。

「む、これはなんだ？」
「ぷるー？」

ノイウエルとプルルが目聡く変化を知り、揃って小首を傾げた。新たに現れたモニター内のそれは、一つの動画である。

なにか巨大な物体が凄まじい速度で空を疾^{はじ}つていく。全体のシルエットや雰囲気は、魔導艦の類ではない。続いて画面が切り替わり、

何処かの都市を高台から撮ったような映像が出た。周囲の明るさから見て、時間帯は真昼頃だろう。豊かそうな街だ。背の高い建築物が立ち並び、最も高い塔の頂上は巨大な時計となっている。現在の建築様式と異なることから、昔の都市映像だと思われた。終末戦争以前のものにしては画像が鮮明なので、もう少し後の時代だろうか。それが突然、厚い黒に覆われ視界が沈んだ。何も音は聞こえない。一分に満たない時間が過ぎ、画面は元の明るさを取り戻す。だが、そこに先まで移っていた街はなかった。撮影箇所的位置が変わっている訳ではないらしい。遠くに見える丘陵や、近くの岩場の感じは同じである。それなのに、都市だけが忽然と消えていた。というより、徹底的に破壊されていた。

街並みの全てが瓦礫と化し、方々から黒煙が上がっている。激しい火の手も其処彼処に見え、長大な建造物はどれ一つとして残っていない。一際目を引いた時計塔も完全に破壊し尽くされ、同じ位置に基底部が辛うじて確認出来る程度だ。後は全てが粉々に粉碎され、原型を留めない凄惨な有様で大地を埋める。

映像はそこで終わった。

「今のは1500年ぐらい前、西大陸グレゴリウムにあった都市らしい。俺様がシュヴァルトライト時代に集めた記録映像の一つで、例のアレを映した貴重なフィルムなんだぜ」

ニタニタと不気味な笑みを浮かべ、自慢げに語るハウエンツァ。その後ろ姿を、ノイウエルとプルルはモニターから視線を外して眺め見る。

「アレとは、なんなのだ？ この街は、どうしてしまったのだ？」
「ぷるる」

両者が放つ好奇の視線を背中に感じ、エルフの科学者は舌を舐めずる。そうかと思えば無精髭だらけで頬のこけた、怪しい悪人にしか見えない凶貌を振り向かせた。最初のように肩越しに一人と一匹を睨み据え、陰惨で残忍な笑みを刻む。

「終末戦争が生んだ、最強にして最大、最優にして最悪の兵器だ。」

僅か7日で世界の半分を焼き尽くしたつつう化け物の中の化け物。

あらゆる魔物の頂点に君臨する究極の闘神。暗黒魔翼、混沌の導き手、果敢なる殺戮皇、運命の破壊者、人類殺し、滅竜帝、幾つもの名前で伝説に謳われる悪夢の具現。それが『古煌龍』^{ティアマット}なのよ」

「これが、古煌龍？」

「ぶるるる」

ノイウェルはアルハルト皇国に居た頃、広大な世界への冒険を夢見て幾つもの書籍を読み漁っていた。その中、特に大きな戦の模様を描いた作品には必ずといっていいほど、彼の悪名が綴られていた。描写こそ様々であったが、一貫して人を遙かに超えて巨大。風よりも速く、火山よりも苛烈。津波以上に容赦なく、地震の如く逃げられない。咆哮は雷鳴の嘶き、吐き出す炎は百億の魔法に勝り、身の硬きこと太古の戦艦とて比肩なし。降臨と共に破壊を招き、全ての命を奪い尽くすこと呼吸するに等しい。世界の全てを敵に回して尚、悠然と勝利を踏み、敗者の証は此の世からの必滅にのみ。

即ち、人には勝つ術がないというのだ。

ノイウェルはこれを単なる伝説か、そうでなければ御伽噺の類かと思っていた。しかしハウエンツアの言葉と開示した映像は、その実在を指摘している。大きな衝撃であった。プルルをして、映像のみで激しく身震いさせるほどである。

「都市を一つ丸々包んじまう、これが奴の影だ。どんだけデカイと思う？ しかも数十秒でこの規模の街をここまでブツ壊すアホらしい性能だぜ。この化け物は、ここ数百年ばかりまったく噂を聞きやしねえがな、今も世界の何処かに居やがるのさ。今は寝てるのかどうかわからねえが、くたばっちゃいねえ筈だぜ。誰かがブツ殺しや、どうしたって話題になるからな。だから明日にも活動を再開するかもしれないねえ。そうなったら、おいガキ、どうするつもりだ？ 尻尾巻いて逃げるのか？ それとも根性出して戦うのか？」

「そんなことを、余に聞かれても……」

「仮にこの化け物が暴れたとしたとして、まともに戦えるのはアスト

ライアだけだと俺様は思うがな」

口角を斜めに吊り上げ、ハウエンツアは白衣の肩を上下させる。
心底可笑しそうに笑っていた。

「何故だ？」

「考えてもみるよ、この艦は戦争末期に造られて保管されてたんだぜ？ その時分に世界を壊しまくってたのは、あのクソドラゴン様だろオが。つまりアストライアは、化け物の王様を仕留める為に造られたと、そう分析した方が自然じゃねえか」

「……」

ノイウェルは何も言い返せない。難しい顔をして俯いてしまった。
何事か考えているのか。頭上のプルルも心配そうにやや萎んで見える。

その姿を見ながらハウエンツアはほくそ笑んだ。「ガキは単純で
イイ」そう内心で嘲笑い、キーボードを叩き始める。

実際のところ古煌龍とアストライアの関係性など分からない。というか、本当に最強の魔物を倒す目的で白亜の巨艦が造られたのなら、実戦投入されずに保管されていたのはおかしい。そこにどのような事情があったかなど知る術もない今となつては、何とも言えないところではあるが。ただ現状から見て、双方に何がしかの関係があるとは思えないのが事実である。艦内の至る所を調べても、魔物云々という資料やデータはまったく出てこなかったのだし。

魔物の王にしても、何時動き出すか知れないのは事実だが、これから動かないことだって充分ある。こちらは不確定要素が大きすぎてどれもが予想の域を出ないが、気にしても仕方ないのでハウエンツアはまったく気にしていない。

もし動いたとしても、アストライアで戦えるとは思ってなかったりする。何せ彼はアストライアの存在に対し、これほど軍艦らしくない内部構造から見て、空中移動型の回避シエルターではないかと考えている程なのだから。戦闘能力は近づく敵を撃滅し、艦内に収容した避難民を守護する為にあるだけで、積極的に戦う意図で設け

られているものではないかもしれない。そう密やかに考察していた。ただ性根の擦れたエルフの科学者は、これら自分の考えを口にするとつもりは皆無であった。適当な仮説でノイウェルを揺すり、アストライア改造計画へ乗り気にさせる。それが目的なのだ。ノイウェルは子供だが、アストライアメンバーに一定の発言力を持つ。彼が活動の主旨を定めれば、他の者達も大凡従うだろう。そうなれば、思う存分に自分が愉しめる。そういう目算、企みであった。

「クッククック、俺様はどっちでもいいがね。何事も備えあれば嬉しいな、とだけ言っておこう」

「そうであるな。考えておこう」

ノイウェルは顔を上げて一言残し、ハウエンツァへと背を向けた。そこからは少々足早に離れていく。

遠退く気配と足音を聞きながら、悪辣なエルフは悪人以外の何者でもない顔で笑っていた。

「ぷるる」

「ハウエンツァの話と、以前に聞いたマリ工殿の予想とは食い違いが見える。マリ工殿は、この艦は元々戦艦ではないかもしれないと言っておった。ハウエンツァ程の者が、その考えに至らぬとも思えん。それにあれだけ押してくるのが、ますますもって怪しい。なので改造というのは当分棚上げだな」

「ぷるるー！」

動力部を去りつつある少年艦長と緑ゼリー型魔力結晶体が、そんな会話をしていたなどハウエンツァには知る由もない。

レリオの欲しい物（前書き）

作者：CORONA

レリオの欲しい物

大空に浮かび、雲を切り裂いて飛翔する剣。全長100mをゆうに超えるその剣、世界最高峰の高速魔導飛翔艦『アストライア』は現在、南大陸マーサレスに位置する技術大国シユヴァルトライテへとやってきていた。

周囲に停めてある一般的な飛翔艦と比べてその形、大きさ共に異彩を放つアストライア。そのアストライアの操舵士であるレリオの部屋は、最上層、居住区にあたる階の一角にあった。

間取りは2LDKと、一人で使うには広すぎる部屋の中は様々な物が乱雑に置かれ、かの変人科学者ハウエンツアの部屋ほどではないが多少の散らかりを見せている。

「ふつ、ふつ、ふつ、ふつ……」

そんな部屋のうちのひとつ、ダンベルなどのトレーニング機器や様々な銃器が置かれた部屋に、部屋の主であるレリオはいた。

部屋の中心で上半身裸でダンベルを手に持ちトレーニングに従事するレリオの身体は、普段のレリオからは想像できないほど逞しい。レリオの見た目は細い。普段の仕草や行動、着痩せなどを考慮にいれても細い部類にはいるだろう。しかし、実際には身体は逞しい。

レリオの主武装であるスナイパーライフルはアンチマテリアルライフルとも呼ばれ、対人狙撃だけではなく戦車や壁越しに攻撃するために使われたりする代物である。そのため破壊力は高いがその分反動も凄まじく、下手に素人が射撃すると身体を痛めてしまう。レリオの身体はそれを防ぎ、反動を抑えこみ使いこなすために鍛えこまれた結果だった。

「ふうー……よし、これで今日のトレーニングは終了だな」

レリオがトレーニングを終了すると同時に扉が開く音が響く。レリオが部屋の入口に視線を向けると、そこにいたのは蒼色の髪を持

つ少年、アストライアの艦長であるノイウエルだった。なぜかは分からないが少し気まずそうな表情を浮かべている。

「お、艦長じゃねーか。俺の部屋にくるとは珍しいな」

「いきなりすまぬな、ノックをしたのだが返事が帰ってこぬから中をのぞかせてもらったらこの部屋から物音がするから入らせてもらった」

「いやいや構わねーよ。気づかない俺が悪いんだ」

どうやら無断で部屋に入ったことを気にしていたらしい。申し訳なさそうに話すノイウエルにレリオは気さくな笑みを浮かべて返す。どうやらそれで安心したのかノイウエルはホッとした表情を浮かべている。

「それにしても、そなたはなかなかいい身体つきをしておるな。正直驚いたぞ」

「それは俺が普段弱々しく見えるってことか？」

「あ、いや、そういう訳ではないのだが……」

「ま、いいけどさ。俺は前線にでて戦うタイプでもないし、そう見られても仕方がないさ」

ノイウエルの言葉にそう返すと、ノイウエルは再び気まずそうな表情を浮かべてしまった。それを見て思わず苦笑いを浮かべたレリオは話の話題を変えようと話し始める。

「で、艦長さんはなんの用事できたんだ？遊びに来た分けじゃないんだろ？」

「そ、そうなのだ！ 実は皆に聞いてまわっていることがあつてな！」

これ幸いにと話始めるノイウエル。艦長を務めているとはいえまだ子供、まだまだ人付き合いには経験が足りてはいないようだ。

「今回の遺跡の調査により見つけた設計図があつただろう？先日それを信用できる所へと売却してきたのだ」

「おお、早いな。幾らで売れたんだ？」

「うむ、総額700000000イエンになった」

んだりと便利なはずだ」

「ふむ、たしかにそなたの言うとおりだ。車両も購入リストにいれておこう」

「俺が欲しいのはそれぐらいか？ 日用品は手持ちの金で手に入るし、余ったら次の冒険にでも役立ててくれ」

ビツと親指を立てて笑みを浮かべるレリオ。愛嬌を感じさせるその笑みにノイウエルも釣られて笑みを浮かべる。

「うむ、しかと承ったぞ。では余は他の者たちの所にも行かなければならないのでこれで失礼するぞ」

そういつて部屋の出口へとノイウエルは向かう。そこでレリオの頭にふと疑問が浮かんだ。

「おい、もしかして買い物には一人で行くつもりか？」

「いや、リリナとともに向かうつもりだが……」

「やつぱりな、その買い物には俺もついていくぜ」

「いやいや、それには及ばんぞ？ ゆっくりと休んでいてくれ」

「それは無理な話つてもんだ。婆さんやハウエの野郎とかならともかく、お前やリリナに銃火器のことがわかるとは思えん」

それを聞くと表情をしかめるノイウエル。どうやら凶星のようだ。「変な業者に捕まって不良品掴まされても困るしな。俺の行きつけの業者がいるからそこを紹介してやるよ。それに車両を運転できるやつがいると荷物を運ぶのも楽だろ？」

「……さきほどリリナに言われたことを余は忘れていたようだ。レリオの言うとおりだ、すまぬが同行を頼む」

「ああ、まかせとけ。損だけはさせねーからよ」

そういつてレリオは身体についた汗をタオルで拭いながら再び愛嬌の漂う笑みを浮かべた。

ラゲナの欲しい物（前書き）

執筆者：ウラン

ラグナの欲しい物

ノイウェルは、今度は病棟煉に向かった。医療班であるリーナとラグナの欲しい物を聞き出すためだ。

ハウエンツアの相手は中々に大変だったが、しかしリーナはともかく、ラグナも侮ってはいけない。

絶対に一筋縄ではいかない。これは早速予測ではなく確定事項である。何故と聞かれても、答は「ラグナだから」の一言くらいしか思い浮かばない、ある種の確信じみたものがあつた。

『ぷるる』

と、彼の頭上に佇んでいた謎の物体X、つまりはプルルというジェル状の何かが励ますように声を震わせる。

「……よし、参るぞ」

少女のような少年は決意を新たに、以前禾槻に聞いたラグナがよくいる病室の扉を開いた。

「ラグナ！ そなたの欲しい物は、一体何なの——」

「……出て行つて」

第一頭がそれだった。

「いや、その、余は、そちの欲しい物をだな——」

「……出て行つて」

ノイウェルの幼い胸に、ズシリ、と何か重たい物が乗った、ような気がした。

「せめて、話だけでも聞いてくれんか——」

「……出て行け」

命令系はより辛かった。

「わ、わかった。何か、すまないことをしたようだ。悪かった」

『ぷっるる』

「あ、これ！ プルル！」

プルルはいつの間にか定位置であるノイウェルの頭から降り、ベ

ツトに無表情で座っているラグナの元へ寄り添ろうとしている。

ラグナにあと30?程で触れる所まで近づくと、一目散に扉まで逃げ、そのままどこかへ去っていった。

「ど、どうしたのだ!? プルル!」

ノイウェルの声が病棟煉に響き渡る。が、プルルが戻ってくることはなかった。

「……で、話って?」

「ん? 出て行かなくてもいいのか?」

「……もう出て行ったから、大丈夫」

「出ていけと言うのはプルルのことだったのか……」

ノイウェルは腑に落ちないような微妙な表情で呟く。因みに、その頭にジェル状の生命体はいない。

「プルルの奴、どこに行ったのかのお」

幼き艦長は独白する。

しかし、いつまでもそうしているわけにはいかないと、己の感情より代表たる立場を優先させ、元々の目的を切り出した。

「何か欲しい物はあるか?」

「……さっきの物体を、消してほしい」

絶句した。だが、これくらいでめげていてはアストライアの代表は務まらないと、己の使命感を募らせる。

「いや、欲しい物で頼む」

「……アレを消すための物」

めげそうになった。正直、一瞬使命感とかどうでもよくなった。

それ程、今のラグナの態度はノイウェルに取って対応し難いものがある。

「なんなのだ……そちはそんなにプルルのことが嫌いなのか?」

「……嫌い」

即答だった。その上、いつものように無表情で語るので、冗談な

んだかそうでないんだか判断できないのが悪質である。

「そう言えば、何故、プルルはそちに近づいた途端逃げ出したのだろつかの？」

「……資格に気付いたみたい」

「死角？」

「……私程度の道具相手にあの反応……相当下位らしい」

「……？何を言っているかわからぬぞ？」

「……当然。わかるように言っていない」

「……そうか」

まあ、ラグナがわけのわからないことを呟くのはよくあることなので、あんまり気にしないことにする。気にしたら負けだ、とも言えなくもない。

「で、プルルに関しない欲しい物はあるかの？」

「……特に」

ないらしい。

「いや、こう、何か新しい武器とか欲しくはないのか？」

「……武器に拘りはない」

どうしたものか、と少年は唸る。

武器以外に思い浮かぶ欲しそうな物がないのか、というラグナの心の声は、ノイウェルには届きそうにない。

「そう言うわけにもいかなのだ。何か使い道はないのか？」

という艦長の質問に、ラグナは突然思いだしたかのように顔を上げ、これに応じた。

「……私の分は、あの不潔エルフの研究費に当てて欲しい」

「ハウエンツアにか？」

ノイウェルは意外そうに聞き返した。と言うか、普通に以外だった。

「それは何故だ？」

「……ついで」

何のどういったついでなのか、^{はなは}甚だ疑問ならぬ様子のノイウェル。

しかしラグナは、これで話は終わりと云わんばかりにベットへ横になり、そのまま寝息を立て始めた。

「……むー、ラグナが寝てしまっではどうにもならんな」

起こさないように病室を出て、ノイウェルはひとまず逃亡中のブルルを探しに行くことに決めた。

リーナの欲しい者（前書き）

執筆者：ウラン

リーナの欲しい者

プルルを回収したノイウエルは、続いてリーナのいる事務室へと足を運んだ。

事務室に到着すると、リーナは包帯にノイウエルには読むことのできない文字を魔草から採取されるインクで刻んでいた。

巻いたところの傷の治癒を補助する魔法の包帯を作っているのである。赤色のインクは、包帯に描かれて数秒立つと透明に消えていく。

しばし作業を黙って見ていると、魔法の包帯を一つ完成させてから、リーナはノイウエルに目をやった。

「どうかした？ ノイウエル君」

「ああ、少しの。しかし、リーナは勤労じゃな。ラグナにも見習って欲しいのだ」

「んー、あの子は魔法が使えないからねえ」

リーナは苦笑しながら答える。

「なんと！ そうであつたのか？」

「意外だつた？」

「いや、ラグナなら魔法くらい使えそうなイメージがあつての。そう言えば使った所を見たことがないの。むう、艦長足るもの、仲間を偏見で見えてはいかな」

「ふふふ。そうねえ、確かにあたしも始めはそう思っていたんだけどね。何でも、体質的に使えないらしいのよ」

微笑みながら説明するリーナの言葉を聞き、ノイウエルはふむ、と頷く。

「そうであつたか。知らなかった。もう少し、仲間を知る努力をせねばいかな」

ふふ、とリーナは再び微笑む。さながら、親戚の子供の夢の話でも聞いているお姉さんのような風貌であつた。

「それでも、ちょっとくらいは手伝って欲しいのだけれどね。まあ、強く言えないのは、惚れた弱み、ってやつかしらね」

何かおかしいな単語が聞こえた気もするが、気のせいだろうと一蹴する。リーナは、アストライアの数少ない常識人の一人なのだ。ただし、ノイウエルの想像の話ではあるが。

その辺で与太話は終わりにして、本題に入ることにする。

「ところでリーナ、最近大きな収入があったであろう？　それで、今我は皆に欲しい物を聞いて回っているのだ。何かあるかの？」

心なしか声は軽い。ラグナ以上に面倒なことにはならないだろう、という予想があったからであろう。

「ラグナが欲しいわ」

所詮は希望的観測だった。

「……いや、金で買える物でたのむ」

心なしか声は固い。ラグナ以上に面倒なことになりそうだ、という予感があったからであろう。

現実とは、非情なものである。

「じゃあ、ラグナの高感度」

「いや、金で買える物でたのむ」

立て続けに同じ言葉を言わなければならない時は、大抵面倒な状況である。

予感は、当たった。

「いやねー、高感度何てお金でいくらでも買えるじゃない」
現実マジ厳しすぎ。

「ほら、今回ラグナは結構活躍したらしいし。それなら先輩としてご褒美に何か欲しい物でも上げようかなって」

それだけ聞くと割かし中のいい先輩後輩にも見える。が――、
「うふふ、それでラグナの高感度が上がるなら安いものよ」

この一言が全てをぶち碎いて粉碎していた。

「ね、ラグナが欲しい物ってわかる？」

「……いや、先程聞いたのだからいいの」

「だよなー。うーん、いつも飾りつけがないし、アクセサリーなんてどうかしら？」

「……………」
ネックレスを着けたラグナを想像してみる。違和感バリバリだった。

「……………ま、まあ、いいんじゃないかの？」

「そう？ それじゃあそうしようかしら」

笑顔で頷くリーナ。が、急に思考顔へと変わる。

「でも、買ってもらった物をあげるって何か微妙ね。ちゃんと自分のお金で買ってあげた方がいい気がするわ」

「あー、そうかもしれんの」

「それに、折角だからデート中に一緒に見たりして選びたいし……………」

突っ込みたい所があった気もするが、スルーしておくことにする。触れたら何か大切なものを失くしてしまいそうだったからだ。

「……………よし、決めたわ」

「どうするのかの？」

と問うと、リーナはとびっきりの笑顔でこう答えた。

「お給料として、現金で頂戴」

「……………心得た」

リーナは堅実的だった。

誰の欲しいモノ（前書き）

執筆者：ウラン

誰の欲しいモノ

アストライアの後部、柄の部分に位置する研究室。そこでハウエンツァ・パルパトは作業に没頭していた。

彼の周り360度に展開された立体ディスプレイ、その内の後方に位置するそれに目を向けると、視界の端に白を捕えた。

白い髪に肌、その上白衣に白色の靴。瞳の二点だけが黒の異彩を放っている。

その無表情から、一見すると学者のように見える。しかし、それはアストライア医療班所属の少女、ラグナであった。

「んだあクソガキ。テメエが訪ねてるたー珍しいこともあったもんだな。何の用だ？」

「……これ」

ラグナは小さな何かを投げて寄こす。ハウエンツァはそれを片手で受け取り、怪訝な顔で手の中の物を見た。

「……フラッシュメモリーか？」

短い棒状で抜き出しの可能なフラグの付いたそれは、フラッシュメモリーと呼ばれる持ち運びに長けた記録媒体機である。

取り合えず、ハウエンツァは近くのモバイルパソコンに挿入してみた。

「……おいおい、んだこりゃあ」

「……先の冒険で、単独行動の機会があつた時に入手したデータ」

「へっ、いい心がけじゃねーか。手前らには俺様に莫大な貸しがあるんだから……よ」

と、そこで話をやめて、画面を凝視する。

ティアマット

「……古煌龍対策プロジェクト？ こりゃー本物か？」

……武装隊投与、全滅。重戦車隊投与、全滅。核爆弾投与、効果なし。

やけに詳しい詳細が載っているな。内容も筋が通っている。これ

はガセでも調べてみる価値はありそうだな」

「……ふうん」

興奮醒めぬ様子のハウエンツアに、ラグナはどうでもよさそうに答える。

「どういつつもりかは知んねえが、凡人にしちゃー上出来だ。他の奴らにも見習ってほしいぜ。これ以降の貸しもしっかり返せよな」

「……貸しを作るのは好きじゃない」

「……ほー。で、だったらどうするっつーんだ？」

「……？ サードソフトプログラム
移行計画」

「は？」

「……？ セカンド サイキッカー サード シフトアップ プログラム
それが？ サードソフトプログラム
移行計画」

「それか？ サードソフトプログラム
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

「……？ サード
移行計画」

ハウエンツアが訝しんでいると、扉の手前で顔だけを向け、こう言った。

「……天使様の道具だよ」
オモチャ

そして、今度こそ姿を消す。

少しして、足音が聞こえなくなった。

「……んだよ」

ハウエンツアは呟く。

「ティアマツト サーボフトラプログラム古煌龍に？ 移行計画。しまいにゃあ天使だあ？」

ハウエンツアは言う。

そして、叫ぶ。

「そういう、そういうことかよ！

そりゃくわしいわけだ！ 知らないはずがねえ！

確かに、確かに貸しの分は受け取ったぞ！ 釣りを出してもいいくらいだ」

クハハハハ、と、エルフは笑った。

「おい、おいおいおい、じゃあようクソババア。

テメエは一体誰だ？」

無に向かつて、彼は訊いた。

セルシアの欲しい物（前書き）

作者：CORONA

セルシアの欲しい物

「ん……あ、もうこんな時間か」

ふと白い壁へと架けられたシンプルな針時計に視線を向けると、時間はすでに夜の１１時を示している。窓の外を眺めても辺りは暗く、昼間の活気も無くなってしまっていた。

「この身体になってからというもの、いまいち時間の感覚が合わないな……」

読んでいた一冊の本を閉じてゆつくりと背を伸ばす。普通の身体ならば長時間同じ体制をとっていて身体が固くなっているところだが、機械でできているこの身体にはまったく関係がない。それでも身体を伸ばしてしまうのは昔からの癖だろう。

そんなことを考えながら読みかけの本を本棚へと移していると、トントんと扉をノックする音が聞こえてきた。

こんな時間に誰だろうか。考えられるのはリリナや禾槻とかだが。「セルシア、まだ起きておったか」

「ええ、まだ起きてますよ」

ゆつくりと扉を開けると、その先に居たのは以外にもノイウエルだった。少し驚きながらもノイウエルを自室の中へと招き入れる。

「その辺にでも座ってください。今飲み物を出しますから」

そういつてもともと部屋に備え付けられていた冷蔵庫へと向かう。私自身は食べたり飲んだりはできないが、来客用に簡単な飲み物とお茶菓子ぐらいなら用意してある。

「いやいや構わんぞ、少し尋ねたいことがあったのでな。それさえ聞ければ余はすぐに帰る。もう夜も遅いからの」

「そうですか？では……」

ノイウエルがそう言うのならは無理に出す必要はないだろう。棚から出したティーカップを元の場所に戻すと、ノイウエルが座っている場所の正面に腰を下ろした。

「で、聞きたいことは？」

「それなのだがな。今回の遺跡調査により発掘した物を売りに出したところ、アストラリアの維持費に回してもかなりの額が余るほどの金額になったのだ。それでな、慰労もかねて皆の欲しい物を買おうということになったのだ」

「欲しい物、ですか……」

「うむ、それでセルシアは何か欲しい物はないか？金の心配はいらんぞ」

いきなり欲しい物と言われても困る。もとより物欲は強いほうではないし、シンプルなこの部屋にも必要最低限は揃っている。それに、すでにこの身体にそれなりの金額が使われているはずだ。これ以上望んでも罰が下るというものだろう。

「今のところは欲しい物はありません。余ったお金は次の冒険の役に立ててください」

私がそう言うとノイウエルは表情をしかめてしまった。

「そういう訳にはいかぬ。ひとりだけなにも与えぬわけにはいかん」

「私はすでにこの身体にお金をかけてしまっています。それに、私はここに居場所を貰えるだけで幸せなのです。これ以上望んだらバチが当たりますよ」

苦笑いを浮かべて告げるが、どうやらノイウエルは納得してはいないのか表情はしかめたままだ。

「それでは他の者の示しが………よし、こうしよう！余からのプレゼントというならセルシアも納得だろう？」

「プレゼント……」

それならば貰わぬわけには行かないだろう。プレゼントというなら拒否すれば失礼に値するだろう。

「わかりました。そういうことならばありがたく受け取りましょう」

私がそう言うとノイウエルは満面の笑みを浮かべてうなずいた。

「そうか！ではセルシアの欲しい物は何なのだ？」

「私は本を所望します」

「本……か？それならば書庫に行けば沢山あるではないか」

「書庫に置いてある本は、いわゆる専門書の類ばかりですよ。私が欲しい物は普通の文芸書……小説などが欲しいんです」

「なるほど……うむ、確かに承ったぞ」

ノイウエルはそう言つとメモをとっていた手帳を閉じて立ち上がった。

「もう帰るのですか？」

「もう時間も遅いからの。では失礼するぞ」

時計を見るともうすぐ12時を回ろつかというところだった。

少し残念だがしょうが無い。

「おやすみなさい、いい夜を」

「うむ、セルシアもな」

そいつってノイウエルは部屋を出ていった。

さて、私が寝る時間までもう少しある。この身体は疲れを知らないため睡眠時間も少しで事足りる。それまで読みかけていた本の続きを読むでしょうか。

アウロの欲しい物……（前書き）

作者：Mr. あいう

アウロの欲しい物……

全長100メートルをゆうに越え、階層も全てで4層。並みのホテルに勝るとも劣らない居住施設が内蔵され、乗員も百人単位を前提に作られている高機動魔導飛翔艦アストライア。

当然厨房もそれだけの乗組員の居る前提で設計されているため、小規模な宴会場のような広さの厨房には仕切りを取っ払ってしまえば象一頭が入りそうな巨大な冷蔵庫、通常の風呂桶5個分もの生簀（現在は水は入ってない）や、横になった人をこんがり焼くの何の支障もないようなかまどが三つなど、正にここで作れない料理は無いと言っても過言ではないような品揃えである。

そんなただっ広い厨房一杯に甘辛い香りを漂わせながらフライパンを揺らして難しい顔をしているアウロ。

横に置いてあった菜箸で器用にそれをつまんで口に入ると、ひどく深刻そうな顔で呟いた。

「……………ふう、む。ちよっと風味が足りないかねえ」

そこには幾多の困難な注文を乗り越えた歴戦の料理人の姿があった。

「おお、ここに居たのかアウロ」

そんな甘辛い香りを目印にノイウエルがやってきた。

幼い艦長の登場に、少々驚きながらもアウロは厨房に幾つもある椅子の一つを手を持った菜箸で指す。

「おや、艦長さん。よく来たねえ。ちよっと待っておくれ。もう少しでこれを火から下ろせるから」

「分かった。……………アウロ。これは？」

香りにつられてフライパンを覗き込んだノイウエルだったが、そのフライパンで炒められているどう見ても何かの眼球にしか見えないうそれを目にしてしばし絶句した。

「ああ、これかい？ 晩酌のお供にちよつとね……よし、出来た」
湯気を立てるそれを密封の出来るプラスチック製の容器にしまい、
ご満悦そうな顔をするアウロ。

半透明の器から覗くそのギョロリとした何かは器に詰められるこ
とにより更に迫力を増した。

無意識に一步距離を置きながら、恐る恐るといった様子で再び尋
ねるノイウエル。

「あの、アウロ。それは………一体誰から取ってきたのだ？」
きよとん、と。

完全に機能停止するアウロ。

腰が引けているノイウエルとの間に質量を持った沈黙がのしかか
る。

その沈黙を破って、

「クホホホホホ、ホーッホフフ………」

アウロが高らかに笑い出した。

「あゝ、あゝそうか。確かにそう見えなくもないさね。しかし、誰
から……ホホホ」

なおも笑い続けるアウロ。そのテンションついていけないノイウ
エルはもう一度良くそれを見て見ると。

「これは……キノコか？」

「そうさ。それはヒトノメヌメリタケっていつてね。市場で安かつ
たから自分用に買ってきたのさ。これは生えてるときはてっぺんに
丸い黒ぼちが付いてる白いキノコってだけでなんでもないんだが、
熱を加えるとかさの部分の内側に丸まって丸くなる性質があるのさ。
そうなるとその黒ぼちの大きさがちようど………」

「人の黒目のようになる、ということか……うむ、まだまだ余も未
熟だ。この世界にこのような不思議なキノコがあったとは驚いた。
それにしてもこの質感といい、滑りといい、名は体を現すといった
ところか」

そういつてしげしげと容器の中のキノコを眺めるノイウエル。

目が合う（気がする）たびに顔をしかめているノイウエルに、ニヤニヤとアウロが尋ねる。

「食べてみるかい？」

「いいのか！？ いただくー！」

目を輝かせて即答だった。

かなり乗り気なノイウエルにアウロは少々あてが外れたように苦笑いする。

（そういえばこの船長さんの好奇心は青天井だったねえ……）

小皿にヒトノメヌメリダケをよそいながら、そんな事を思うアウロだった。

「なんと！ このプリプリとした歯ごたえに噛む度ににじみ出る山菜の旨み、甘辛い味付けの中にもキチンとこのキノコ本来の風味が残っており。相変わらずアウロの料理は美味しいな」

満面の笑みで眼球（にしか見えないキノコ）をフォークで突き刺し口に運ぶ美少年を、微笑ましく見つめている老女。第三者がやって来てこの光景を目にしたら卒倒しかねない絵である。

「ありがとね艦長さん。ところで、私を探していたようだけど、何か用事でもあったのかい？」

「ああ、そうだった。すっかり忘れておった。実はな、先刻の遺跡調査では皆ずいぶんと活躍してくれた。そのおかげで潤沢に資金が得られて、少々自由に使えるのだ。そこで、皆の労をねぎらうと言う意味でも皆に欲しい物を聞いて回っているのだ。まあ、いわばプレゼントだ。アウロ、何か欲しいものはあるか」

「そう、ねえ。ちょっと待って」

そう言つて、何やら食材の入った棚をぐそぐそとやっているアウロ。

「？ 一体何をやっているのだ」

「いや、なにか足りなくなっている調味料は無いかと思ってね」

そんな答えに、幼い艦長はかぶりを振った。

「いや、そんな些細なものではなく、アウロが純粹に欲しい物を言ってくれて構わないのだぞ？　むしろ言ってくれねば余が困る。仲間の望みを最大限叶えるのが艦長としての余の勤めだからな」

「……そうねえ、この歳になってからはすっかり欲が無くなってしまったからねえ。ここに居りゃあ衣食住は足りてるし、今更貯蓄しても使う前にお迎えがきちゃあ世話が無い………そうだ。一つだけ欲しい物があつたさね」

「そうか、して、欲しい物と言うのは？」

なにやら黒い笑顔を浮かべているアウロ。

「酒さ、食材に関してはリリナさんは私に一任してくれるんだが、生憎酒に関しては恨みでもあるかのように財布の紐が硬くてね。私も料理酒って名目で会計監査をくぐり抜けちゃあいるんだがね。そうすると今度はあんまり高価な銘柄は買えないんで困ってたのさ。でも、艦長さんからのプレゼントって形なら、あのメイドさんも何も言えないでしょう。ホホホ……」

含み笑いをしているアウロに、なにやら難しそうな表情を浮かべて首を傾げるノイウエル。

「ふうむ、酒か。リリナは良く『あんなものは飲み物ではありません。毒です。即効性の毒です。この私がノイウエル様より先に寝入ってしまうとは……』と申しておったが、しかしレリオやスキנקは好んで飲んでおる。ああも極端に意見が分かれるその『酒』なる飲み物は一体どのようなものなのだ？」

純粹な疑問の表情を浮かべるノイウエル。

アウロの表情が徐々に悪巧みを愉しむそれへと変わっていく。

「ホホ、艦長さん。お酒に興味があるのかい？　実体験を伴わずに善悪を断ずるなんて無理な話さね。……おや、ちょうどこんな所に私が隠してる名酒『風雷坊』が。どうだい、一杯。悪を飲み下してからでないかと真に正義を理解する事は出来ない。これ、アウロ婆さんの知恵袋さ」

そういつてまた何処から取り出したかグラスに並々と酒を注ぐア

ウロ。

元が好奇心で一杯なノイウェルがそう言われて引き下がるはずも無く。

「確かにアウロの言う事にも一理ある。そうだな、一度口にして見れば、リリナが正しいのか、それとも他の乗組員が正しいのかはつきりする。何事も経験だ」

そう言って、その端正な唇にグラスを近づけていくノイウェル。その様子を眺めるアウロは、さながらイブに知恵の実を食べるようそそのかした蛇の如く。

が、そのグラスが触れるか触れないかの瀬戸際。突如扉の向こうから地鳴りが響いたかと思うと、扉が蹴破られた。と、同時に二本のナイフが閃く。

鋭利な刃は一つは持っているノイウェルを傷つけることなくグラスを両断。もう一つは正確にアウロの首筋を狙っていた。

隠す気も無い尋常ではない殺気に気づいたアウロが避けなければ間違いなく必殺の一撃となっていたであろう攻撃。

扉の残骸に立つはメイド服を見に纏う修羅。立ち上る殺気もそのままに焦点の合わない目を血走らせたリリナが叫ぶ。

「貴様とは何時か敵対すると思っていたが、アウロ。よもや純真なノイウェル様を誑かし、あまつさえ毒を盛ろうとは！ わが主を汚そうとした狼藉、その血を持って贖え！」

もはやキャラなど様々なものが崩壊したリリナが今までない迫力を持ってアウロに襲い掛かる。

「ち、違うぞリリナ。これは余が望んでやったことだな……」

オーバーヒートしたりリリナにはノイウェルの声さえ届かず、これが後にアストライア内で『第一次メイド料理長戦争』と呼ばれる事となるのは、また別の話。

禾槻の欲しい物（前書き）

執筆者：ういいち

禾槻の欲しい物

「禾槻、入るぞ？」

そう断りを入れたノイウエルの正面で、白い扉が自動的にスライドする。開かれた道の先に数歩踏み込んで、少年は広々とした室内を見回した。

床には暖色系のカーペットが敷かれ、なにやらフワフワでモコモコの動物を模ったらしいスリッパが置かれている。壁に目をやれば雪を被った峻厳な山や、夕日に照らされ紅色に染まる海という風景が、額縁に収められ飾られていた。どれもが写真と見紛う緻密な精巧さで描かれた絵画であり、思わず感嘆の吐息が漏れる。

芸術というものがよく分からないノイウエルにも、その絵が持つ力強さや迫力、荘厳さは充分に理解出来た。立ち寄った街で見掛けるや気に入り、善は急げと購入してくる禾槻の気持ちも分からないではない。

そのまま壁伝いに見ていくと、西壁全面を覆うように設えられた本棚が知れる。スチールに似た材質で作られたノイウエルよりも背の高い本棚には、漫画や小説や雑誌がズラリと並べられていた。作家別、ジャンル別、シリーズごと、全てが均整を持って所定の位置に据えられており、見た目は綺麗で機能的にも分かり易い。一系乱れぬ揃い様は、持ち主の性格を表しているようだ。

かなりの蔵書量があり、数日を費やしても全て読破することなど到底不可能だろう。そもそもノイウエルにとつて興味の湧かないような品目もチラホラ。あんな物を読み始めたら即刻睡魔に襲われそうである。代表的なのは「月刊・掃除の友」とか「クリーニング奥義百選」とか「この掃除機が凄い」とか「現在考察今時のカビ取り」とか。

様々な嗜好を持つアストライアメンバーであるが、これらを好んで読むのは禾槻だけだとノイウエルは確信している。残念ながら彼

と趣味の話で盛り上がる事は難しそうだ。

別所へ視線を転じれば、本棚の隣にこれまた大きなクローゼットがある。リリナが同じメイド服を何着も持っているように、禾槻も同じ様相の着物を多く持っているらしい。これは本人談であり確認こそしてはいないものの、閉ざされたクローゼット内に収納されていると予想が立つ。

他に大きく場所を取っているのは、新品同様皺なくシーツの張られたベッド、部屋の中央に置かれた簡素だが素材の味が活きているテーブルなどだ。それらは勿論、室内の何処にも汚れはなく、紙屑一つ落ちていない。驚異的な清潔さが保たれている空間は、ハウエンスアの研究室と比べると月と泥沼ほども差がある。

「ぷるる」

「うーむ、禾槻は居らぬようだな」

頭上のプルルと一緒に唸り、ノイウエルは小首を傾げた。室内には人氣も、部屋の主の姿もない。

「鍵も掛けずに留守にするとは、無用心であるな」

無警戒に開いたドアの先で、よもや当人が居ないとは思ってもみなかった。少々バツが悪そうにしながらも、ノイウエルは腕を組んで禾槻の危機意識に疑問を抱く。

いかにアストライアの内部が安全で、仲間達のことを信用しているとしても、こうまで開けっ広げでは些か心配になってくる。今のノイウエルのように、つい室内に踏み入ってしまう場合だって無いではないのだから。

「後で言うっておかねばな。しかし此处に居らぬとしたら、はて何処であろうか」

「ぷる」

ノイウエルは首を捻って思案する。プルルも一緒に考える態だ。アストライアメンバー内で、禾槻は居場所の特定が最も難しい。各メンバーは自室や食堂を除けば、大体居る所が決まっている。リリナならばノイウエルの傍、レリオは操舵席のある艦橋、ラグナと

リーナは医務室であるし、アウロとエレナは調理場だ。スキंकは自室よりも書庫に居る方が多いぐらいであり、ハウエンツァも研究室か機関部に限定される。比較的行動範囲の広いセルシアは書庫や娛樂ルーム、調整や定期検査の關係からハウエンツァの研究室という可能性が割かし高い。

対して禾槻は衛生官という立場上、常に艦内を動き回っている。同じ場所に留まっている場合が少なく、いざ捜してみるとこれが中々見付からないのだ。なまじアストライアが広い分、彼の活動領域も広大で捕捉が難しいのである。

モップや掃除機を持って、掃除しつつ移動する姿は何度か見かけてきた。ただ目撃場所はその都度異なっている。それを考えると見つけるのは簡単にいきそうもない。

「悩んでいても仕方ない。行こうぞ」
「ぶるるー」

ノイウェルは考えるのを止め、早々に踵を返す。頭にプルルを乗せたまま、禾槻の部屋を後にした。

あれから20分ほど艦内を彷徨った末、甲板に出てみた所で禾槻を発見することが出来た。

彼は何時もの着物姿で、甲板に洗濯物を干している。頑丈な支柱を立て、その間にワイヤーを通して作った自前の物干しに、洗ったばかりの皆の着衣を掛けていた。流石に全員分だと凄まじい量であり、広い甲板は大部分が綺麗に伸ばされた洗濯物で埋まって見える。サイズも色彩もバラバラな上着やズボンやスカートや白衣や軍服が整然と並び、風に吹かれてはためく様は壮観である。その所帯じみた光景が、流麗な飛翔艦には少々不釣り合いではあるが。

「禾槻、此処に居ったのか。捜したぞ」

「ぶるるる」

「やあ、ノイウェル君にプルルじゃないか。どうかしたの？」

ノイウェルが声を掛けると、空になった洗濯籠を抱えて禾槻が振

り返った。穏やかな笑顔には一仕事を終えた達成感が滲んでいる。

「実はな、前回の冒険で得た報酬を使い、皆に欲しい物を提供しようと思うのだ。それで各自に何がいいかを聞いて回っていたのだが」

「ああ、なるほど。それで僕を捜してたんだね」

「うむ。一度は部屋に行つたのだが居らなんだのな。というか、そなた鍵も掛けずに無用心であるぞ」

「ぷるー！」

指を差し向け、厳しい顔で指摘するノイウエルとプルル。そんな一人と一匹を前にして、禾槻は苦笑しながら頬を掻いた。

「あちゃー、また忘れてた。ついウツカリ。あははは」

「前にも同じことをしておったのか。そなた掃除や洗濯は完璧であるのに、肝心な所で抜けておるな」

洗濯籠を傍らに置いて緊張感なく微笑む禾槻を見ながら、ノイウエルはちよつと呆れて肩をすくめた。

幼い頃から一人で世の中を渡り歩いてきたという禾槻は、しつかりしているようであり、以外とそうでもなかったりする。普段は温厚で人当たりもよく好感の持てる人物であるから、こうしたたまのボカは愛嬌の部類だろう。

「此処に来てから、警戒心が随分緩んじやつたかな？ でも取られて困る物もないし、問題はないんだけどね」

何事もないように禾槻が笑うと、ノイウエルも溜息を一つ吐いて微笑んだ。

なんだかんだでこの二人、気が合うし仲が良い。年齢の隔たりを感じさせない友情のようなものが、互いの間には存在している。なんとはなしにそう感じるのは、ノイウエルの気のせいではないだろう。

「それで、禾槻は何が欲しいのだ？」

「うーん、そうだなあ。最新型の掃除機でしょ、サイクロン洗浄の洗濯機でしょ、それから新しい食器洗い機に、カビ取りハイパー、漂白剤に柔軟剤、あとはねえ……」

目を輝かせて指折り数える禾槻の注文を、ノイウエルは持参したメモ帳に記入していく。

夢見る乙女のような面持ちで語る青年の姿をみれば、それが単純な仕事道具でなく彼個人の心を満たす趣味物であることが容易に知れる。嬉々として清掃具を要求するのも、年頃の若者的にどうかと思うが。

「ふむふむ。よく分かった。それではこれらを揃えましょう」
「ぶるる」

禾槻の話を聞き終えると、ノイウエルは納得顔でメモ帳を閉じた。頭上のプルルもどことなく満足気だ。

「それでは、余はいくとしよう。邪魔をしたな」

「ねえ、ノイウエル君は何が欲しいの？」

背を向けて歩き出そうとしたノイウエルへ、背後から禾槻が問い掛ける。その言葉を受けて、少年艦長は踏み出そうとしていた足を止めた。

そのまま振り返らないで、少しの間だけ黙考する。

「余はこうして皆と冒険が出来れば本望であるからな。特別欲しい物は……花の種や球根などが良いかもしれん」

「お花かあ。確かに綺麗だし、育てるのは楽しそうだね。でもちよつと意外かな」

顎に手をあて頷きながら、微妙に考える風情になる禾槻。その気配を背中越しに感じながら、ノイウエルは苦笑した。

「余が育てるのではない。母上がな、御気にいられるかと思って」

「ノイウエル君のお母さんが？」

「うむ。アルハルト皇国に居た頃から、母上はよく草花を愛でておられた。小さく儚い命であるが、日々を懸命に生き抜いて咲き誇る姿が、美しく愛しいのだと言っておられた。だからプレゼントしようと思うのだ。それに育てる楽しみがあれば、御一人でも寂しくないかもしれぬしな」

ノイウエルは母を想い、望郷の眼差しで虚空を見詰めた。流れる

風と雲海の彼方に、その姿を見るかのように。

哀愁漂う小さな背中を直視して、禾槻は頬を緩める。彼の記憶にある母も、やはり小さな草花を大切にする人だった。

「そっか。ノイウエル君は、お母さん思いなんだね」

言いが早いのか、禾槻は後ろから無防備なノイウエルを抱き締める。両膝を甲板に突いて背丈を合わせ、肩から腕を回して胸元に引き寄せた。

突然のことに驚いたのはノイウエルで、驚愕の表情を浮かべてあたふたと身を振る。

「な、な、なにをするのだ禾槻！」

「うーん、あんまりノイウエル君が健気で可愛いもんだから、ついハグハグしたくなっちゃった。こう、ぎゅーっとね」

言いながら、禾槻は更にノイウエルを強く抱く。ただし少年が痛がらないよう充分に力加減を考慮しての抱擁だ。

困惑する少年を余所に、褐色の青年は嬉そうやら楽しそうやら。

「は、放さぬか」

「あはは、スキンシップ、スキンシップ。ノイウエル君は可愛いなあ」

「余にこうしてベタベタくっついてくるのは、そなたぐらいであるぞ。何がそんなに楽しいのだ？」

じたばたもかくノイウエルを抱き締めたまま、禾槻は笑顔を絶やさない。その姿は傍から見ると、仲良さげな兄弟がじゃれあっているようにしか見えなかった。

スキנקの欲しい物ッ!? (そんな驚く事でもない

クルー達の要望を粗方聞いて回ったノイウエルは、相方のプルルを頭に乗せ、ひとまず書庫へ向かっていた。

別に休憩に向かう訳ではない。

これもまた、「クルーにプレゼントの要望を聞きに向かう」という作業の一環に過ぎないのである。

そのクルーとは、読者諸君もとつくとうにお気づきであろう。

砂漠の魔物ことアストライアの異形司書・スキנקである。

莫大な蔵書を誇るアストライアの書庫管理を担う彼は大抵の場合書庫に住み着いていた。

ココン

ノイウエルは軽めに書庫の戸をノックする。

「スキנק、居るかー?」

「プルー(居ますかー?)」

何時もならばここで手早く鍵が開けられ、『あンれまア艦長、今回はどういったご用件でエ?』などと良いながらスキנקが顔を出したりするのだがしかし、今回はそれが無かった。

「寝ておるのかのう?」

「プルー(私に振られても返答に困りますよ)」

念の為ノイウエルは魔法で図書館内に探りを入れてみたが、反応は

一切無い。

「…外出中か？」

「プルウー（そうみたいですネ）」

「仕方ない…出直すとするか」「多分部屋じゃないかな」

書庫から引き返そうと振り向いたノイウェルに話しかけてきたのは、割烹着に箒とちり取りというスタイルの禾槻だった。

「誰かと思えば禾槻であつたか。して、スキנקが部屋に居るというのは？」

「ノコギリに金槌、あとバーナーの音がしてたし、何よりスキנקさんの声が響いてたからね。」

多分間違い無いよ」

「左様か。恩に切るぞ」

「プルルウー（有り難う御座います）」

禾槻の情報を頼りにスキנקの部屋へと向かうノイウェルとプルルだったが、ここで禾槻の言葉が頭に引っかかる。

「ノコギリに金槌は良いとして…バーナーとな？奴は一体何を始める気だ？」

「プル…ル…（おかしいですね…何故か寒気が…）」

何はともあれ、一人と一柱（？）はスキנקの部屋の前までやって来た。

―部屋の前―

ガガガガン！ガガン！ガンガン！

ヴァゴヴァゴヴァゴヴァゴッ！ヴァヴァヴァヴァヴァヴァゴギリッ！

キシュボオアアアアアッ！ピシュボルアアアアア！

——『怪物く化け物なんてエ俺にとっちゃア褒め言葉アアア！
可能な限り、命の果てまでエエエエやってやれエエエエ！』——

禾槻の情報は間違っていないかった。

猛烈な勢いで金槌の音が響き、有り得ないような速度でノコギリが
建材を切り、ガスバーナーが火を噴く音がドア越しに聞こえてくる。
更に、中でそれら道具を操っているであろうスキנקは、何やら歌
まで歌っている。

「（ノックする気も失せるな……）」

「（初めて出会った瞬間逃げたのは正解だったらしい……）」

『江西ゴツその心がアく求めるものはアく負けるっ気ーしない筈
あー！……っと、そろそろ良い具合だな。』

良し、休憩すつか』

「（良し、隙が出来た。出てきたところでごく自然に話しかけて――

——『エおっしやアーい！』——むぎやふツ！？』

タイミングを見計らってスキנקが部屋から出てきたところで話し
かけようと想定していたノイウエルだったが、『自然に歩いている
ふり』をしようとした所、スキנקが蹴破るようにして開け放った
扉が顔面にぶち当たり、その影響で吹き飛ばされてしまった。

「あん？何か今木の板と脊椎動物が衝突するような音がしたような
……」

辺りを見渡したスキנקは、自分の上司が6 m程先で横たわってい

るのを目にする。

「――で、あらア、ー！？

艦長！？艦長オー！」

「……おお、スキンクか……じつはそなたに――

――誰に殺られたんです！？一体何処の誰がこんな真似を！まさか第三帝国機構の連中か！？――

――いや、そなたにだな――

――「いや……こいつはまさか白崎一族の……？だとしたら何て連中だ！――11の男の娘を狙うなんぞ性根が腐ってやがる！」――

――おい、聞いておるのかスキンク――

――「いや待てよ？奴らは俺が十五の頃当主が子宮に癌発病して途絶えた筈……となるともしかして」「スキィィィィンク！」――はい、何でしょう？」

ノイウエルは慣れない大声で因縁だらけの異形児が引き起こす無限ループを断ち切る事に成功した。

「実を言うと、先の一件でそなたが解読してくれた設計図。あれがシュヴァルトライテで高く売れたのだ」

「おお、そいつあ良かった」

「それで、だ。慰労も兼ねてその売り上げの一部で、そなた等の欲しい物を買ってやろうかと、そう思ってたな。

スキンクよ、何か欲しい物は無いか？」

「そうさなア……今ちよつと部屋の改造をやってるんで、その備品の不足分が欲しい所なんですよねエ」

「……改造……？」

寒気がした。

この男、ハウエンツァより友好的かつ協力的でこそあるものの、その思考はハウエンツァ以上に得体が知れない。

否、この男に比べればハウエンツアすら可愛く思えてくる。

セルシアは書庫の本が専門書や学術書ばかりと言っていた。

アストライアは元々軍用にと作られたのでそれは当然の事だったが、この男が司書に就任して以来その原則は揺らぎ始めている。

補給のために立ち寄る各所で、こっそり船を抜け出したこの男は、何処からか私物の本を回収してきては隠れた場所に本棚を増設しているのである（クルーの殆どはその事実気付いていない）。

しかもその本というのは、正体不明の言語が手書きで記されたノートであったり、明らかに読者を厳選するようなタイトル・内容の本であったりするのである。

その男が部屋を改造ともなると……まさか魔物の製造でもやろうと
いうのか？

一瞬良からぬ事を創造してしまったノイウエルだが、艦長として自分に尽くしてくれるクルーを疑う事は悪徳だと思い、詳細を伺うことにした。

「改造とは？」

「温室ですよ。食材・戦力に使えるような動植物を養殖するんです」

「ほ、ほう……成る程……野菜を作ったり鳥を育てたりするのだな？」

絶対違う。ノイウエルはそう革新しながらも一縷の希望を捨てなかった。

「いやあ、そっち方面は市販品で事足りるでしょう？」

「養殖するのは大体野草と虫が主ですよ」

「そ、そうなのか？」

等と疑問系で返しているがしかし、そんな事は分かり切っていた事である。

「ひとまずクヌギの木を組織培養してヤマタイマユガの養殖にチャレンジしてみようかと。」

コイツ等が出す糸を煮詰めて生成すると絹なんて比じゃねえ価格で売れるんです。

熱帯域に棲息するモリキユミスコガネの雌幼虫はクリーミーな味わいに定評があるって言いますし、フートゼファールつつーハーブの一種は右半分が緑で左半分が黒つつー変わり種なんですけど、この葉を乾燥粉末にして混ぜ合わせた奴は豚肉の味を絶大に引き上げる効果があるんです。

ただ出回って無えのが欠点なんで、梅田の奴に取り寄せさせて組織培養でもやってやろうかと。

あとはそうさなあ……オリムラカミキリとシノノスズメとかやってみたいですねえ」

「……その蟲は何だ？」

オリムラといえばヤマタイの神話に伝わる神託により再起と反逆の力を得た英雄であり、シノノノはその伴侶であつたとされているが……」

「由来はまさにそつからなんですよ。」

でね？コイツ等を幼虫期から同じ飼育箱で育てると、何故かカミキリムシが雄に、スズメガが雌になっちゃうんですって。どんな手段を試しても、十割方。

んでしかも、全く別の昆虫とは思えない連携を見せやがりましたね？どっかの研究報告書によりやこの二匹が交尾して間にとんでもねえのが産まれたとかなんとか！」

「とんでもないもの？」

「そこについちゃ記録が無えもんですから詳細は不明ですが、育ててみる価値は大有りかと思ひましてねえ。」

総額はしめて……190万で所ですかねエ」

「190万…？」

「そうなんですよ。そこが悩み所なんですよねー。」

しかも今し方梅田の奴に連絡取ったんですが、シノノスズメの食草が成長必要分手に入らないもんでそっちでどうにかしてくれとか帰って来やがりましてね？

雌の成長分となると軽く5株は要るんですよー。あとすっかり忘れてましたが空調と温度管理も大切だからコンピュータ制御の出来るエアークンデিশヨナーが要るんでしたわ。

こうなると総額が… あっちゃあ、こりゃ酷え。一気に225万にまで引き上がったしまいましたわ。

艦長… 足りない分は俺のギャラから引くって事でどうにかありませんかね…？」

卑屈になつて頼み込むスキנקに対するノイウエルの返答は、意外にもあつさりしたものだつた。

「別に構わぬぞ？その程度そなたの給金から差し引く必要性も無い。というか、アストライアは企業でないのだから給料等という制度、そもそも有りもせぬではないか。

安心するが良いぞスキנק。あの時一目見たその日より、余はそなたの尽きる事なき探求心が本物であると見抜いておる。

そら、あと50万ほどであれば自由に使つて構わんぞ？」

「有り難う御座います。では、その50万は此方で私的に使用させて貰つても構いませんか？

温室とはまた違った趣味に使いたいんですが」

「構わぬ。存分に使うが良い」

「有り難う御座います。それでは注文の品の方、宜しくお願い致します」

こうしてスキנקの注文を取り終えたノイウエルだったが、この後

アウロやリーナが彼と結託し、妙な材料を用いた料理や菓子類がクルー達に振る舞われる事になる事など知る由も無い。

食材の正体を知らされた一部クルーがストレートに反応したり、より怪しげになったリーナの菓子をつまんで倒れた真人間のクルーの体組織や生理機能が面白過ぎる変異を引き起こすのも、そう先の話ではない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3536s/>

皆の欲しい物はなんなのだ

2011年5月26日16時25分発行